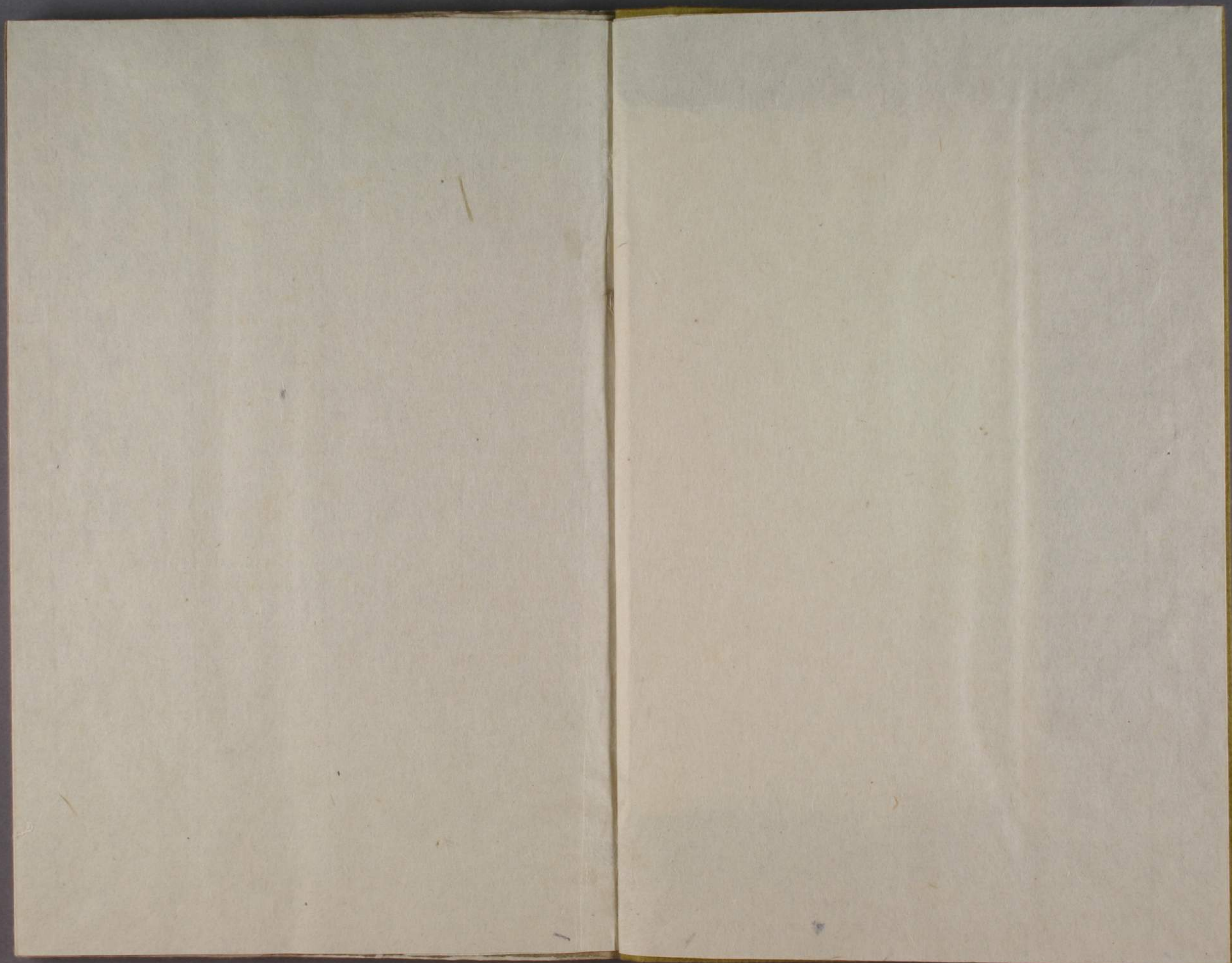


甲寅
來貢
西客對話
宇田川槐園寫
一冊

洋学文庫
文庫 8
B 2





甲寅
來真

西客對話

阿蘭陀人の東都へ來りて百有餘年未
例年參府ありし。寛政二年より高船一艘
に限る交易も亦裁し仰せ付るも東都の來
貢も亦年々一度來るに止まり命せらる恒
例如比丹といふ者鑿船司より國王より
貢成齋し來り

朝子湯吉に隨て來る者兩人あり一人ハ「レキリ
イバ」といふ職より交易掛引の筆を執るもの
長る一人ハ「シプルメイトル」といふもの

醫せりしむま、官醫の方々療法治術等對
談質問はき免名呼り多とせりしむまに
毎歲醫官は諸君

官に同き旅館にいらし益我請いあり陪臣の醫
官の參向を多し我得す今茲寛政六年申寅彼
五箇年自れ參向に當りしと例しく四月十五日以
て長崎に發し二月下旬に東都にいらる今茲
ハ早春の參向を御し止免あり三月廿初旬
命下り同十五日に彼地に發し四月廿二日到着き

法眼桂川君例に依り對話の伺ひしし出さる
吾黨一も深く志誠和氣素乃醫學に刻み
桂公と社盟あり故以り研究のき免同行
共々質問あり此の旨は
官に希い當りしとせりしむまに

松平陸奥守家持 大槻玄澤
松平越中守宗清 本林島甫齋
松平越後守家春 宇田川玄隨

酒井修理大夫家事

杉田三之白

奥平九郎家事

前野良澤

右和虫書同字之考ニ出度い何レ茂虫書ノ
内年未積疑ニ出度い知毛人ノ事ニ質問
付ハリ後未考合ヤお成い多ク有リ度
ニ存い不若等ハ度いハ私対談ニ切右共
立一五人宛同乃レ付度了存い依し中内意也
向いコト

四月

松川甫周

執事如諸分御伴儀ありて同月二十八日御側
御用御取次加納遠州公とて桂川君ハ左の通
御書付れ渡す云

覚

同學之若何ニ奈他人ノ討法ニ成録之旨
使者之心ニ長崎寺行ハヤキニ蘇可ク致
る

同日松川退出の後ハ了り出度い不困ニ翌二十九日
本藩の官長ニ以次才以ハ願書ニ見出度

ニシテ
ツキハ

様
録す 留守君の大夫泉田隅州連に出き候納せし
崎守行平賀式部少輔殿へ使者 留守君役替致し
野路之節
了届書出せ 白川津山郷いつ
ま七同文あり 文左子記

陸奥守家方大槻玄澤義徳川南園根由同
学ニる 変書執行仕不度 甫園根紅毛人
由對信之成所越川節 尤玄澤より七附係取致
Pいははは補仕いこと

五月二日

招平陸奥守家方
菅野謙之丞

は届書後取ねし翌三日七時了右は用人とて

留守居名出さる左の各付お渡さる

由自醫師大槻玄澤方紅毛人の對信し候様由
此より下とれ候い紅毛人の出立も是れ急い
新信より合P君殿い尤由川南園同及元
切きとれ是れ立とれ候川南園不許候こと

平一ノ三

右し書付し候は是れ由る玄澤也は候し是れ由
子に不及い尤七時迄方り七時音P後立川南園
んゆ候こととあはり候い

同夜八つ時了官もとて呼奉り本邸を出せしはら
落さるる落に因りて翌四日桂多に詣りてはるり
厚く謝しつゝ萬事りり念ふ九つ時以今息甫謙
本村島甫斎字田川玄隨同行して長崎を館多に
到ふ大通同加福安治部へ生會し對談のり成
謀れは日官醫方栗本瑞見桂川甫周同甫謙
洪江長伯の諸君人等侍り七人の七崎を源右衛門
座敷に待合在りては對談始ふ小通詞今
村金兵衛通辨と

左の紙は寫書紙用にとあり由りて官長とて
うふ

菅野勝三郎殿

平賀成少輔の
道内赤い色
お川孫助の
中野の建太の

心紙習上仕小紙を方概言はし紅毛の對談とて
當年々々府も選り紅毛船の津前停り不仕
お成り山府逗留も端末七日山前地出立を仕儀
之れ存りてありし時御事ありしは誠對談と致し
存り御事ありし時御事ありしは誠對談と致し

い守り出されし方ありし内なる我の言を對談出
来りし言は信言はせんとし信言は信言の言とて
信言の言を武部が輔にせしむる言の言

五月四日

翌五日之德等同行四時以去邊を到ふは對談
しん教栗本瑞見佐藤と仙杜川甫内の三と一橋
醫官石川之常息之徳余等三人あり晝あり天文
方は京中對談ありしあり合や故七時迄好ふと通同
か福安治郎通稱を著るあり河野杉田二氏也侍る

了參事ありし言呼形一舉余等年來此等に篤き
於竹杜公乃深志に出るものありし陪臣乃自とて
恭しき

嚴命誠奉し殊方の異客に應接致許すも素業の
疑問に及ひしもの其益不益ハ姑く論せし我道の
面目にしし本懐は至り実り感戴に堪へし困りし
顛末此記しし一冊子と爲し後昆に傳ふ

仲夏望日

申す刻も對談始ふ粟本桂川有法眼法江子等に
招し々加比丹帶首に二階座敷に到ふ毛氈敷敷
並へ長崎奉行の檢使 給人士のよし彼人あまの「シムルバンジョウ」
との葛上使の轉音と云きくも崎人
ウハゲンシと 下檢使 崎奉行の町使と云るも帯刀の者あり
呼ぶる ちまひ「オンドルバンジョウ」
ちん末座に列せ諸君順次成逐く坐に就く加
比丹出迎ひ互に礼辞何れ小通同今村金多助通辨と
加比丹名取

メイステル ゲイスベル
Gisbert オトマン メイステル

ハ學師の子あり碩學者人に此稱号取許さしやうハ
其人學師子くハ乃師表と云ふ識量何ふ者にや生
國ハ喜望峯^{カアプ}父母ハ和華院人ありと云ふ^{カアプ}昌^{カアプ}ハ布刺^{カアプ}ハ亞
非利加洲の要港和蘭に隸さる所あり會長取置と
国人多く住居を母ともいふ國の人多くと云ふ彼婦人
も亦り住ると云ふ一商船有云取置と云ふ此地
いへる再い丹と云ふいへる應帝亞の跋太亞^{カアプ}野
に抵り去と云ふ本邦に亦り加比丹今年
齡四十二板蓮脱と云ふ常に眼鏡取用也

「レキリーバ」（等者以名致あり）

Joseph Wilhelm Pass. （ハルゴ） 年二十七善書あり
筆跡學士といふは家方右筆風あり
皆ともいふるべきなり

醫生の名致

アマプロレウス （ロツ） テネイキ

Ambrasia Adelphi （ハルゴ） *Bernhard Keller.* （ケル）

とつゝ「ホーゴドイツ」（縣の名あり） 郷里の産子とて 年

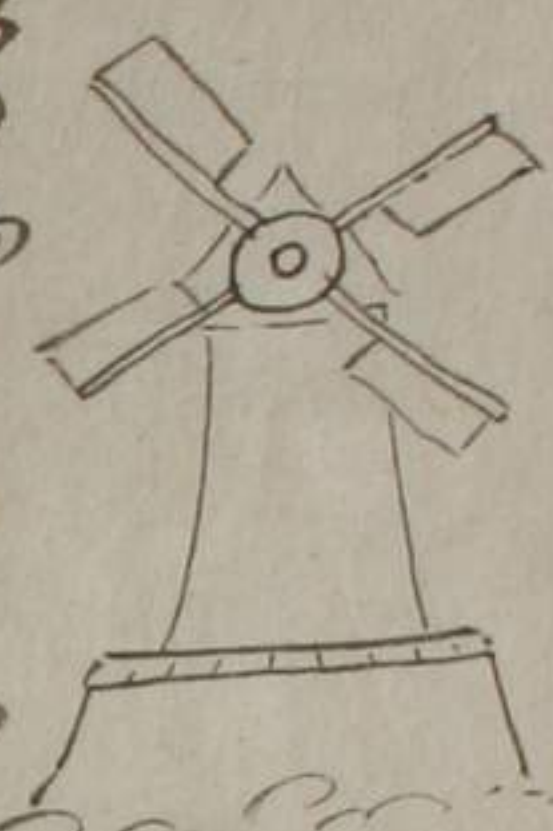
三十二才学才は短もは富にせよといつても稍志
あふんとつゝ殊に物産を好むより 諸君各椅子

にわたり加比丹の前に進み接洽ゆふは日醫官
諸子に皆同多し一人の舌一人の醫を甚く煩死
あり衆口いふる喧しき末列の吾輩親く對作
に及びしき遺憾がわらむと中余々譯文為しかり
「ヘイステル」外科各折傷篇中骨節撞破致為を種々
の器械等致文を中々に

Doze Die Miek van maken.

といふ語を其物知まらざる疑わらざる由り
紙抄〜 醫書に問ふ答〜曰〜「ウイキ」ハ「ウイ

此の活板は得るべきなりといふ加比丹傍らと解し
 曰く「モーレン」ハ「ウインドモーレン」の「ウインド」は風し「モーレン」は
 「ウイキ」ハ「ウインド」モーレンなり「ウキ」ハ「ウエゲル」は「ウエ」ハ「ウ」ハ



此の如く上に長三角形を為し、旋
 廻する者なり、因る顧みれば此三角
 形の物より動かし、骨が碎き傷むと云ふ事、即
 加比丹圖に依るに余に示す退る按るに奇器圖説
 に風扇と譯する者是なり、圖式用法等詳しを併
 せ考へ、その物の實にや、此類、具法解し、具物と云

と或知さる、故に和辞の層中に求むといふも、曉解
 しか、此實に質向に及ぶ、解さる者あり、一
 事といふも、さきに由る一、篇瞭然たり、愉快に堪ふ
 と解るなり

又外科諸術を説く、大成の層に往々に目撃す
 べり、内科集の層にいつかのまゝ、及ぶ、只
 「ボイセン」「ヘイステル」「ブカン」此類の并別に何先生
 此撰著に何といふ層あり、と問ふに、彼嘗て
 向に内科の善居齋し、あれ、と聞き、か、いし、と

又へ醫書二三冊を携へて示さば足るに多し
 外科書ありて皆約略なるありて其中多しハ「ホーゴ
 ドイツ」印刻の書あり此醫生其國の産あり故あり
 言辭異に〜〜一句と〜〜吾輩了解し〜
 「バックス」といふ人の繡帯の術記し〜〜書あり此書
 筆れ久く欲き所なるあり一覽〜〜只渴望す
 ぶれあり 眼科の書あり 名紙

Oog Kiekton
 Door Eben Haer Joseph Jacob Plenck.

と題せし一巻の山冊ありて療術の系方の書
 載せし詳ありとらんぬ勿くは際委く足るに
 得し社中に和蘭眼科以修ん〜志を〜
 吾輩以購て求ふ〜故子〜亦渴望に堪へ
 最上徳内印普清 蝦夷地とて持来りし産
 物今某侯の珍藏とある者借る〜山を以て
 質をに多しハ皆見及り〜者あり〜一奇觀
 ありといへるのナ〜中「オロシヤ」の所有北邊は寒
 地を海水氷凝るを氷の上は〜舟以牽らむ

一獸ありと彼土あり「オレン」といふ蝦夷に似く「ツチカイ」といふより一其皮と角と皮出し示す加比丹能くまきり
其間知るる委く物任るふま獣和名呼る
Diver と呼ふと不地多きく此物に充つ果し
然るも其後并に乾隆御製文集に載ふ所下におき
蝦夷に似く刀劔子代へ用ふるあり「アヂ」と名く「ア
ツケレ」邊の土中より出るといふ按ふるに里薑の類を
ア古の砲石なりとせしむるや或人の考に東夷傳
及び其釣の各に日本往古石の似く鏝と名るといふ者

是多しんうといふと醫書「ケルレル」ナリと云ふ
「とあひあるあり」と云考ふる也し 自註の
物品「リコンカモイ」といふ獸の皮 毛も鼠色あり大く
脆し骨も軟弱なり
此と示さるる所の圖は又多に大さ犬の如く形麻に似たり
とし角及び尾あり前足は長く足短し「カラフト」山中にあり
「リコン」ハ夷言針ふと「カモイ」ハ尊敬と云ふ
と云ふ又神の形と云ふに圖を此子替せし
鳥を形其く、雲あり或人津輕に産する「ウトウ」と
いふを其類あると云ふと云ふ小鳥を名未詳は者千翎
其より西客見及つる者亦云
加比丹カヒタンの蠟とて造るる人の首側面を解きかけ

此系者或出々々地公に醫ふ皮は剥く筋脈見
て其上耳下机里尔唾安等以何々の形状を澤宛然
ととと真に逼る其借筋の名号醫衛生ケルレシ羅
旬語ま〜暗記〜一々に指示を頸の切口を〜氣安食
道及び大絡二道より側面の顔色眼口半の開キ、その相
形を澤冷然と〜人び〜瞻視や〜心吾輩は如キ己に
刑戻以割解〜其真は歎〜益感〜
己さるる、奇巧精妙今に始々如るあり〜驚嘆とさ
に堪〜 柁郎察國都把里馬と云所〜婦人乃

造る所ありといふ令身備えらと也作はる購て味
及んる必希ある、醫に志すことの此物及びさる
に解剖せよ〜軌微さるに足き、醫家講習の
為り後〜者と云〜

坐に葡萄酒以後〜諸子に供を「カアアウ井」二ウツト
左井二ト二壺アリ各硝子盃〜一飲を口東の蜜漬
るもの瓜「コヒヒル」トの其品「ゲム」也「カヤニ」
「アナ」之^果密柑以剥〜る如キ、との^味等あり此蜜漬
皆天空地方に産故に名を天空なる、其物品も詳

はやくと方通るは舎も「キキッア」といふ蜜漬の虫を色深
緑冬瓜の蒟蒻切りに切るふれに上には冰糖の
摻ふふと〜新度〜も〜見さる所といふ余輩の因とを
始らす所あり自餘の皆已に足る所ありゆに「パイヤ」とい
者なり

疑同敷件もとり〜も敷人の同族日暮に近〜各々の
此期〜〜いふふ

五日

書前々天文宗佐る本山路の二君徒弟は引き来る〜対簿を

西客書舗の後申の刻過〜醫宗の対談始ふ栗本佐
藤桂川三序石川三徳及い予等三人を式昨日〜念劇
も亦同し大通り加福安治郎通辨と

向ふ刺絡の法諸君に詳あり病に臨〜瀉血と〜も
亦諸君に書せり平素好ん〜我邦の生徒と〜施を
〜と〜と〜他と〜の血の虚実多少を察〜と
〜と〜其疹假如何 答ふ先づ其の肺の疹〜浮沈
強弱大小等〜定ふと〜又〜喜〜眠〜或ハ
常に臥〜衣嗜升或ハ常に臥〜昏瞶〜低〜擡け

得ざる等其人皆施し可なりと云ふ此血瘀積の
所あるを治すに可なり浮血は必す功有りん然れども此ハ
已に病多かり余疑同ハ左に好む將に病は治るを
其人面を^眼紅光皮膚血を手に看は治るんとの同
まとも煩光の同再同に及^ひり^んは^せ憾あり

問 初めの小児暗帯の後より痕収りて赤肉突起し
稀膿淋漓諸方は治施さともいふに答^は再々^と瘡也
八九年いづるを尋ね療法如何 答 「千ニキキルヲ取
り置棉三枚重にし之れ者に浸し患上に治る又

其上に棉布を覆ひ繃帯三四遍施固し卷き止る
置る必^と効ありと云ふ也

「千ニキキルヲ」方

没薬 八錢

右末と焼酎九斗を其中に浸し硝子壺に入れ
固封し天日に晒す之數日時々振まらば良也
免く^い用^に充^る也

問 脈は血乃循りた疹あり定^るる形也遲速後
急浮沈大小血は何と云ふ 故治のてく^に効あり、和

三葉より何とんわく脈を診めよとよの意は同くふに
 其意通し兼只一通り脈の診め方同しと思ふに其答に
 診脈は脈下に於てらんびくく椅子に懸し先兩手
 内にむかし小指の方向側より膝上に置し先醫書
 二指以内より診めざるを脈を自然の状より血
 行よく診ひ得らぬをりしとよの因る觀めに此方此
 如く患者乃脈を醫書の書上に受け且是を仰りて
 診めるときは自然の状に背き又醫書と患者との手脈にぬ
 ちてもよとよの血使自然の循行運動は孰も察するに

つて思ふと思つて回してふれつてふれつて内景は
 尽しつてふれつて建つて診法は其の著実少く味
 何れも脈を診め乃意は其の詳審なるをいふ
 くに及りし亦遺恨あり

叔尔列尔予に早き邦種痘乃法ありて余醫宗金
 鑑乃載ふ所の法に似てくを邦施し用ふてこれ大異
 然告く叔尔列尔曰く此支那の法なりと余
 考へばはるやまは法は功あり此は一良法何れ

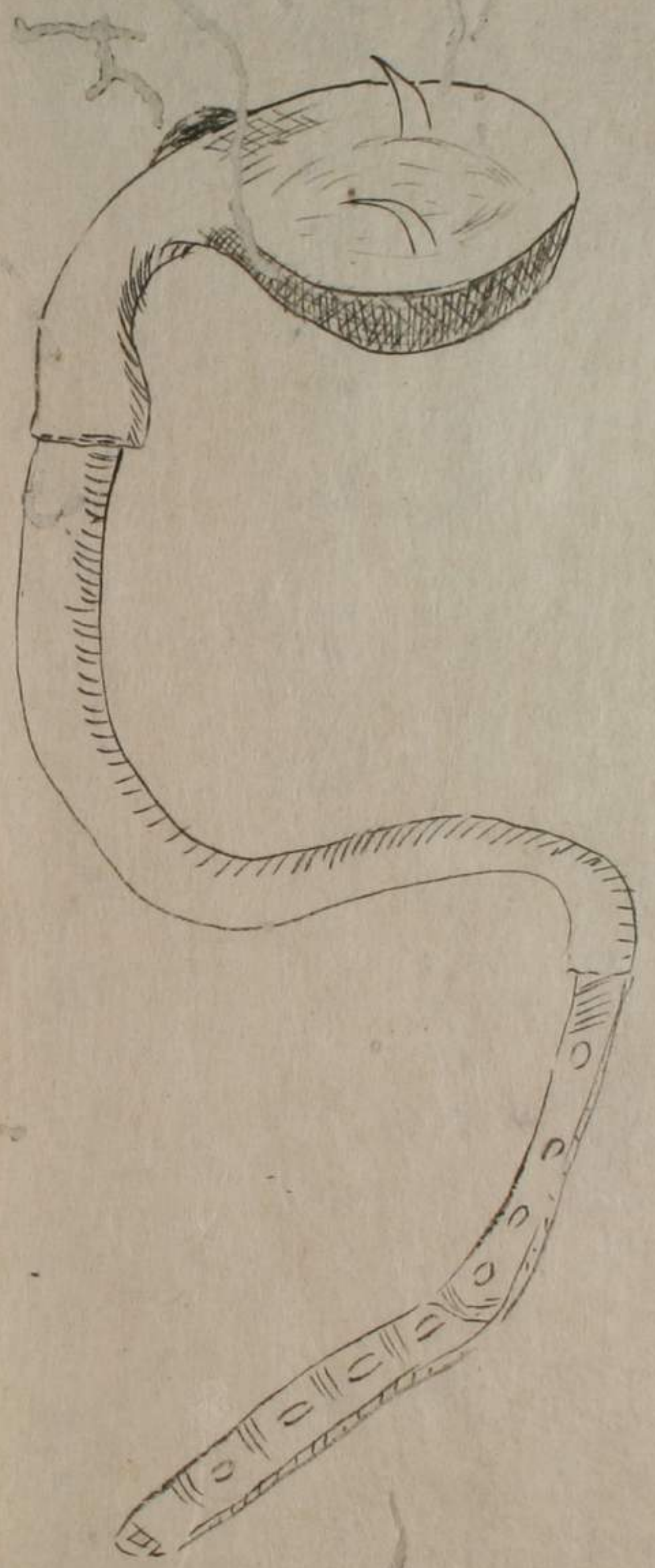
小児の左の肘骨の内

 此假也

て一々所ラニセトまく小瘡び作るその内に極る軽き順症の
膿水以一点り持し入る一二三日り五六日を
其間に滯身必き厄点して痛む軽易多しと云予曰く
此法既く一へイステル外科局手術部第十五号子出せる
法と似しるいいま法と異なれど同く且間便か
アとりの退く扱るにへイステル五百七号載る
不詳カレ且危ヤク為に得又あり和三系ありいニシ
テニ ^{ゲル}キンテルボツケンとりのイニエニテニハ接くとりキン
テルボツケンハ痘瘡あり唐山カク種痘とり西洋カクハ

接痘とりカドルト桂今に痘瘡各一冊を贈ふ他日今
預せんとり
却ル列々室に入る茶籠取求尺ふ蓋紙發る是を
以て高丹油圓數十品バルセムテリヤニイの類既に
厄知不可の者あり且内キキキとりの解熱は奇驗多し
此散茶フラスコの中に入り此和膏呼ぶコルツバスト
とり熱解解ま不皮とりの形也國後は考の不不
に在方此産せる所あり徑年入夏の加比丹テッシギ
栗皮此也一代用く可り也ありとり却ル

引糸曰くコルツバストハモ料もさしして彼邦あま
 民万多豊田のく毒に用ひりて是に代るにエイケボム
 即大葉摺此皮取用ふる亦佳なりといふ



石の如きハ鼻奴え不便毒写此瘡瘍口飲アりのふ
 者に以此丸味のみ或患上に膏く長き方ハ廻し貯糸く
 繋り止免ミユク丸キマヤハ内に斑^{パニヤ}子花取充し欠くまら
 本の方ハ鋼鉄少く一面ハ革にく包み末のふに至る
 ハ革紐あり自ら回てくさ成試子に此鉄具も亦軟小
 くよくあるハ様みく且強し丸味ハ股造は回て廻
 くに廻る内にあくちるふ不志免付るふ採りてさめ能
 七銚のキくふ者あり陰化てく末の紐に穴あけて丸キ
 者此上に引かけ玉マに作りてさめなるめハ股の器也

圖に及ぶと毎々にして且細鉄或銅等亦よく造るべき
 こゝに後に祀やもたせんと今至るは物成るべく誠意
 の精巧又感をもたに録す

又 Cortez Simarba, 其の事成りし味且苦し主はあ

ワイルトラス 筆者 に居て今も彼邦よりスプレーキカールトラス
 警戒の強四枚取居して殆どまことに禮法に附し切意成
 けり唯者余に三幕客の居成をしんに殆どまことに字
 記す

^{養生} *Lecht* ^教 *ijis om Wel te sterken, op*
tegen volgt konnefchijn een gestrand ^{日照}
kind schijnt het vliem. ^{大傷}

切意

生シ養生ハサハ病且死ニ至ル故ニ其教ヲミツ之ニ從トキハ
 雨後忽チ日ノ照ヌカ如シ又無智ノ小兒モ火傷ノ後火シ然ルカ

櫻園梅
 註未語
 不可流

如シ 虎シ養生スルヤウニ生テ保テ雨晴レハ日照ル病ヲ慎マハ自身壯ナリ
 小兒モ火傷スレハ火シ然ルカ如ク慎ムコトハ權慎サルモノナリ

De Tijden Verandelen en De menschen oec
van merriam Wasden.

時侯をえ不好ク

切意

霖雨密雲ノ晴カリキモ時至レハ美好ノ天氣トナル人事モ亦
斯ノ如シ然ルニ時ヲ知サル者徒ニ造作ヲ為ス猶シ崑崙奴
ノ洗浴スルカ如シ
四季ノ移リ易ルカ如ク人世モ其好シヤ
故ニク果ウノ里キモ洗フカヨイ

nicht getrouwen en vertrouwt niemand met
geen ge niet wilt dat u gefchiede doe
dat ook aan een ander niet.

切意

你人ノ信アリテ共ニ交シ結ヘキ者ナレト云然レ之シ怪ムコト勿

此カ朋友ノ交際ホコレニ同シ甲ニ友善スレハ乙ニハ否ラス

一夫朋友ノ交天倫ニ續モノナレハ
其雄キヲ斯ノ如クナルシ云カ

Erzilt Quint Het dings en zegt maar
magt die appel valt niet ver van Bijn

boom.

切意

善道ニ進ント欲スル者ハ勉焉トシテ心ヲ領テ作善ノ本ニ依ルコト
純一ナルベシ果実落レ其樹シ去ルコト遠カラズ
善徳ト云モノハ長クツツクモノデ和同シテ物ヲ成ストキガマシ成ス
ナリ喻ハキヲ其モ然レテ其ノ其ニ其ノ其カシ○和同シテ善徳ヲ精テ
タトニキガヒ有テモ遠カラズ
此語別ニ意義アル
ヘシ未詳ナラフ

石川元徳彼土醫家の名哲歟問ふ 其言曰く中興の祖

厄勒西亞人 Hippocrates

銜てん

言ひ人 Galenus

羅馬人

Epistrotus

此等往昔の名醫ありしを

予々幸諸君は涉獵をなされ際此諸先生の說多し一
ステルの肩に紹説に醫家の傳統は確にや

暮に隣りて蘭客の諸子と辞交し一信不疑同條々

事件もさしつことも發達迫るの如く崎陽の尹

とて是の兩日は限り復參會をなさんと成りし僅に

是等の兩日限りて接待且同難の人多し聊て

りる所の事多しとて其の精洋ふしとす餘尚

可成起りに暇をんご遺恨の至るも又をなれは

首を俵くさるんご其の跡望もそののみ只返すは

陪臣 茂實の軍辱く

台命は奉とらると感戴もな所なり

寛政六年甲寅五月

後學 大槻茂實録

附錄

堪達漢

都奈葛乙 葛刺弗葛 楞齊見 和蘭

阿楞 魯齊亞

西書云楞齊見似鹿而大其角亦至夏則解毛色
類驢一產一子孕二百八十日而生四年始長成其走最
速不捨晝夜四十八九里臘皮亞魯齊亞等之人用以
製鞍韉又以其皮為裘云乾隆御製文集角韉歌堪達

右西曆譯

漢者出黑龍江似鹿而大亦雅釋獸所謂麀者也又
寧古塔將軍巴靈阿奏進東海使鹿部所產馴鹿
勝負載似牛堪乘騎似馬依媚於人乃又過之又夜譚隨
錄李因言其容喀尔喀時其人騎獸似鹿而非又
曰似麀而大者曰堪達尔汗疑即麀也昔却後低多力
毛粗而長為裘而煖角扁而厚為決良人以其皮可裘
而角可決也驥馬鬃子逐而獲之獲厚利予靈
然曰夫皮所以庇角所以衛也今乃知庇身者適
以戕人自衛者又自斃是可悲也李曰其唇方大而

厚多膏。味極美。八珍中有握辰。即此物也。以角試水。
毒則角綠色。國瑞按寧古塔黑龍江沿岸之地也。喀
爾喀未詳。古北口外有喀兒沁。恐此地也乎。所謂馴鹿者。
堪達漢其堪達爾汗亦一韻之轉。蓋東北夷之方言
也。再按沈存中筆談云。北狄有駝鹿。極大而色蒼
黃。與班角大而文。堅瑩如玉。茸亦可用。亦或此
物也乎。古書注

寬政甲寅仲夏

桂川甫周國瑞識



槐園先生膝下

